

September

2013

Kalimpong Times



みなさん、こんにちは！！カリポンタイムズ9月号です。7月からダージリン地域の政情不安定により、現地活動が行えず、7、8月号と休刊しましたが、9月に入り、ようやく政情も安定し、現地活動も再開できるようになりました。9月上旬に雨季が終わったカリポンでは、幸運なことに大きな災害は起きませんでした。日照不足やその他の原因で日本米に病気が発生しています。9月21日ようやくカリポンに入ることができたので、急いで村を視察し、日本米の状態を確認しています。今月号では、日本米栽培の状況を中心にお伝えします。

残念なことに、7月からダージリン地域でゴルカランド運動が激しくなり、9月中旬までストライキのために町の機能が失われました。店だけでなく学校も閉鎖され、現地活動を実施するのが大変困難となりました。9月21日ようやく日本人スタッフも現地に入ることができ、活動を再開しています。ゴルカランド運動はすでに何十年も続く州新設に向けた運動ですが、私の周りの住民は大きな関心はなく、平穏な暮らしを望んでいます。

⌘

村にはもちろん田植え機がないため、農家の方々は手で行います。しかし、それはまるで田植え機のように高速で確実です。長年の経験により、動きが体に染みついているようです。カリポンの狭い棚田では、無理に田植え機を用いるよりも、手で植えた方が効率的であるのかもしれませんが。しかし、栽培面積が広がれば広がるほど、労働力が必要になるため、カリポンの将来の事を考えると、機械化も視野に入れる必要があるのかもしれませんが。以前、シッキム州にある国立農業大学に園芸農業研修生と訪問した際、田植え機があったのを覚えています。それは、エンジンがなく、マニュアルで操作する田植え機なのですが、残念ながら動かすところを見ることはできませんでした。来シーズン以降、このような田植え機や他の農具の導入も視野にいれながら、大学側と様々な意見交換をしていければと思います。

シッキムもカリポン同様、山間部における農業であるため、問題や課題について大学側とよく理解し合うことができます。そこから解決策を見つけて行くのが至難の業ですが、インド農法、日本農法をミックスさせ、現地の地形や気候、環境に適した農業を導く事が私達の仕事であり、カリポンの農業の未来であると言えるでしょう。



写真① マニュアル式の田植え機

今年の日本の梅雨は平年より早く入り、早く明けましたが、カリポンをはじめ、インドにおいても今年は早く雨季に入りました。日本でもニュースで報道されていたように、5月にはインド北部で大雨による大災害が発生しました。今年は世界中で大雨に伴う災害が発生していますが、水不足という地域もあり、地球全体で何かが起こっているような気がしてなりません。カリポンの農家も環境問題に関心のある農家が増えています。未来の農村の子供達のためにも、今から対策を考える必要があります。

一時帰国前の6月末までに11村の田を視察し、苗の状況を確認すると共に、田植えに向けた水の管理法等、田周りの草刈りの重要性を説明しました。有機農法で栽培するためにも、害虫による被害を少しでも抑えなければなりません。今シーズンは、アラハバードで活動されておられる“アーシャ=アジアの農民と歩む会”の三浦さんからの助言を生かし、鶏糞を追肥で施用するよう指導しました。現地農家は米栽培で鶏糞を施用したことがないため、この農法に驚いています。伝統的農法に新しい農法を取り入れることで、環境や社会の変化に柔軟に対応できるよう、今後も指導を続けていくことが必要だと考えています。

カリンボンに戻って来る前に、現地スタッフからいもち病が発生した村があると聞いていたので、カリンボンに戻り次第すぐにその村へ直行しました。昨年、最も多くの収穫量(約 650kg)を達成した Mr. Limbu のいる Dungra 村です。農薬を散布することで、被害を最小限に抑える必要がありました。できるだけ無農薬で栽培したいのですが、全減を避けるために不可欠な作業です。雨季が長く、日照不足でいもち病発生要素が揃いやすいので、換気をよくするためにできるだけ株間を開けて田植えをするように、何度も念を押して助言をしても、多く植えた方が多く収穫できるという考えから脱する事ができない農家がまだまだたくさんいます。ここは辛抱強く農家と向き合って、将来を見据えた栽培を行うという事を話し合っていかなければなりません。



写真② Dungra 村の Mr. K.B. Subba (7月訪問時)

もちろん、全ての村でいもち病が発生したわけではありません。先日訪問した Chibbo 村では、大きな病気・害虫による被害もなく、綺麗な穂を垂れて、今か今かと収穫を待っている日本米が立ち並んでいました。この村では、Japanese Rice Farmer of the Year 2012 を受賞した Teresa さんが今シーズンも栽培を行っています。昨シーズンのお米の品質は栽培農家の中で最も良く、多くの日本人の方からもおいしい、というフィードバックをたくさんいただきました。今シーズンのお米も昨シーズン同様、おいしいお米に仕上がっていると期待できます。すでに収穫は始まっており、これから乾燥・脱穀作業です。



写真③ Chibbo 村の Teresa さん (後ろは全て日本米)

今シーズンは、30戸の農家が日本米栽培を行っているため、足踏み脱穀機をスムーズに共有しなければなりません。昨シーズンは 30kg 以上ある脱穀機を、竹棒で神輿のように担ぎながら、急な山道を登り下りました。今シーズンは、農家の方々の負担を減らすため、新規に 2 台の足踏み脱穀機を購入しました。また、唐箕製作には時間を要しているため、日本で唐箕を購入し、それをカリンボンまで運ぶことに路線変更しました。

インドでご活躍されている日本人の方々に 1kg でも多くのカリンボン米をお届けしたいと思っています。今年の日米販売開始は 10 月下旬頃を見していますが、物価高騰のため、価格を上げることが検討しています。ご了承ください。販売に関する詳細はまた改めて連絡いたします！

-お知らせ-

10月1日を持って、花田は同僚の稲垣佑花里氏に現地調整員の職を引き継ぐこととなりました。これまでカリンボン産日本米や味噌、その他 JCK (JICA Project Cooperative Society of Kalimpong) の生産物をご購入して下さった皆様、大変お世話になりました。皆様からのフィードバックを元に、今後さらに日本米の品質とサービスの向上を目指すよう、陰ながらサポートさせていただきます。JCK 生産物ご購入、ご質問等におけるメールの連絡先は変更しませんが、稲垣の電話番号は以下の通りです。コルカタで参加させていただいた餅つき大会では、焼き鳥や餅など日本の味を満喫でき、また多くの日本人の方々と色々なお話をさせていただき、大変感謝しております。今後も農業と国際協力の道を進むつもりです。またインドでお目にかかることがあるかもしれませんので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

カリンボンや JCK のこういった情報を掲載してほしい！などご意見・ご要望がありましたら、以下の連絡先までご連絡よろしくお願い致します。

9月30日まで

花田博之

Tel: (0)8158043485

Email: rhppkalimpong@gmail.com

10月1日から

稲垣佑花里 (いながきゆかり) 現地調整員

Tel: (0)8927402887

Email: rhppkalimpong@gmail.com

現地スタッフ Mr. Prabir S. Rajwar :

Tel: (0)8509520355

Email: yamaflora@sify.com